

# 6 南アジアの音楽とその拡がり ——日本の視点から

南アジアの音楽も、世界各地で演奏され楽しめるようになりました。この地域は、「インド世界」とも言われ、古代インド的文化を基礎にしながら、2500年を超える歴史の中で言語、宗教、社会構造、生活習慣などを共有してきました。18世紀中期以降の植民地化を経て、20世紀中期からは、インド、パーキスタン、バングラデシュなどの7つの国で構成されています。

本稿での用語「インド」は、南アジアを指すことも、インド共和国を指すこともあります。「インド音楽」も、インド世界に共通する音楽文化であり、またインド共和国の音楽でもあります。

以下では、「南アジアの音楽」、「インド移民と音楽」、「日本とインド音楽」、「在日インド系コミュニティの音楽」、「多文化共生と包摂的社会における音楽文化の可能性」の5つのトピックで、インド音楽の拡がりについて考えます。

## 1 南アジアの音楽

南アジアの音楽は大きく、①宮廷起源の古典音楽、②宗教音楽、③ポピュラー音楽、④民俗音楽の4つに分類できます。

古典音楽は、大きく北の伝統（ヒンドゥスターニー音楽）と南の伝統（カルナータカ音楽）に分かれます。前者は、北インド、パーキスタン、バングラデシュやネパールで、後者は主に南インド、スリランカで演奏されます。歴史的に、日本でよく知られたインド音楽は前者です。日本人のインド音楽奏者が演奏する内容も、多くはヒンドゥスターニー音楽です。

宗教音楽は、宗教儀礼と一体となったもので、聖典、経典、啓典などの宗教的テキストや詩歌などと、音楽的要素が結び付いた形をとります。

ポピュラー音楽は録音複製技術と結び付き、消

費者である「大衆」向けに流通する音楽です。南アジアの場合は、インド映画がポピュラー音楽の制作の中心分野となりました。いわゆる「洋楽」の影響を受けて変容しても、インド映画出自のポピュラー音楽の力は近年でも衰えを知りません。

一方、日常生活の中で育まれた民謡や民俗舞踊といった民俗音楽・芸能は、村落部では多く存在しています。ただ、映画音楽との関係が強く意識されて、相互に影響しています。本補助事業成果報告会（令和4年度）のために撮影されたマハーラーシュトラ州の民俗舞踊ラーヴァニーも、映画と結び付いた新しい形式を備えていました。

## 2 インド移民とインド音楽

人間の移動性（Sheller 2014）という観点からインド系の人々の音楽活動を観察すると、多くの気づきがあります。移民は、人々が空間を物理的に移動する事象です。ところが今では、音楽も情報もインターネット上の仮想空間において、境界を越えて容易に移動します。音楽文化は生まれた土地から溢れ出し、世界に拡がっています。むしろ、移動とともに古くから交流・移動してきたと見ることができます（定住 vs. ノマド）。移動することこそ文化の本質なのだとも言えるでしょう。

インド音楽の担い手たちは、英国、米国、欧州、西アジア、東南アジア、日本など、世界に拡がっています。インドの政府統計によれば、海外に居住するインド系人口は約3500万人（2024年5月）です。これらの人々が住む所には宗教活動、エンターテインメント活動があり、先に述べた4種の音楽が演奏される可能性があります（民俗音楽はやや少ないかもしれませんが）。

インド系の移民人口（OCI: Overseas Citizenship of India）を世界規模で見れば、彼らが一番多く

居住するのは米国であり、その数は約540万人（全人口比約1.57%）です（Ministry of Foreign Affairs, Government of India 2024, 及び United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Population Division 2024）。一方、同人口数で210国中第43位の日本では、約4.8万人（同0.004%）のOCIしかいません（出入国管理庁2024）。それでも、日本に住むインド系の人々が、インド音楽を楽しみ演奏していることは確実です。

海外に居住するインド系の音楽家の例として、ロンドン在住の南インド系太鼓奏者を見ましょう。彼は、イギリスや欧州で開催されるイベントのために遠征してくるインド人演奏家の伴奏を務め、頻繁に移動しています。一方12月になると、南インドのチェンナイ市で開催される音楽祭に出演しながら、ここに住む師匠のレッスンを受けます。また逆に、南インドに居住する音楽教師が、海外に在住するインド系の学生にインターネット上でレッスンを行う事例も多く観察できます（寺田2021）。日本に住むインド系の方々も、自分たちの音楽活動を、インターネット上で海外に居住するインド人に発信する場合があります。こうした物理的／仮想的ルートを通じての、音楽のノマド化は高まっていると考えられます。

### 3 日本とインド音楽

では、日本で演奏されるインド音楽は、インド系の人々によるものだけでしょうか？ 答えはNOです。日本人の中にも、人数が少ないにもかかわらず、たいへん長くかつ深くインド音楽に触れ、研鑽を積み、質の高いインド音楽を演奏する例が見られます。

毎年開催される「ナマステ・インディア」（東京）、「インディアメーラー」（神戸）などのインドの文化イベントがあります。ステージ上の演奏者の大半は、関東や関西地域で活躍する日本人インド音楽演奏者たちです。その歴史を振り返りましょう。

1970年代には、大学での研究・教育上の関心

から、伝統楽器（シタール）のレッスンが芸術大学で開始されました（公的領域での音楽受容）。担当教員は、ネパールからの日本への移民（国際結婚）でした。同じ時期にインドネシアのガムラン音楽の教育も始まり、いわゆる民族音楽へ啓蒙も進められました。

一方、イギリスのロックバンドThe Beatlesのインド音楽への傾倒も、世界中の音楽ファンにインド音楽を印象付けました。そのプームの中、上述のネパール出身のインド音楽担当教員の下には、若者がたくさん集まりました。音楽を学びにインドへ出かける者さえ現れました（私的領域での音楽受容）。なにを隠そう筆者もその内の一人で、現在でも少しずつですがシタールを演奏しています。

こうした動向を支え、新しい音楽が好きな人々にインドの音楽を広める役割を担ったものがもう1つありました。各国の「民族音楽」を紹介する音源の販売やラジオ放送でした（準公的受容）。それらの多くの音源には、学術研究に基づく解説が付いていました。

1991年以降、インドはアクセスし易い国となり、多くの外国人がインド音楽を学びに出かけるようになりました。こうした訳で、日本人もインド音楽をたくさん演奏しているのです。

### 4 在日インド系コミュニティの音楽

ここでは、日本で生活するインド系コミュニティのインド音楽に焦点を当てます。

まず、外国ルーツの人々が日本で長期的に生活する場合の在留資格を検討しましょう。現在、出身国をインドとする人々約4.8万人が、日本で生活しています。その中に多い在留資格は、「技術・人文知識・国際業務」「家族滞在」（各約1.2万人）です（出入国管理庁2024）。前者は、一般的にITエンジニア、機械土木の建築設計者、会計業務、マーケティング業務、経営コンサルティング、通訳翻訳、デザイナー、クリエイター、語学学校の先生といった職種が入ります。インド系

の人々の場合は、ITエンジニアが多いです。これと同数レベルでの家族滞在があるということになります。実際、東京江戸川区・江東区などで見かける、比較的若い世代の3人家族のような姿が思い浮かびます。また「永住者」(9千人)カテゴリーの人々も同等レベルで住んでいます。

では、日本国内のどの地域にインド系の人々が多いでしょうか。歴史的には、横浜(1893年[明26]頃～)、神戸(1923年[大12]頃～)、沖縄(1972年[昭47]～)、東京・江戸川区(1998年[平10]～)といった順番でインド系の人々が生活するようになりました。横浜、神戸、沖縄までのグループは貿易従事者や商人が主でした。江戸川区の場合は、コンピューターの2000年問題解決のために雇われたIT技術者たちとその家族が中心でした。

次に、彼らに関わる音楽の事例を、宗教・祭礼とイベントの観点から示していきます。

## (1) 宗教音楽

インドの宗教は大きく2つに分かれます。ヒンドゥー教とイスラーム教です。

そのほか、シク教、ジャイナ教、キリスト教や仏教もあります。本稿では、ヒンドゥー教とシク教の事例により、沖縄、神戸、東京地域での宗教音楽について概観します。

**写真1**の祭壇には、ヒンドゥー教の一神であるガネーシャ神(象の神)が祀られています。ヒンドゥー教では、さまざまな祭礼でマントラや、



写真1 ヒンドゥー教のガネーシャ神  
(江戸川印度文化センター、筆者撮影)

シュローカというテキストを極めて旋律的に唱えます。この写真を撮影した江戸川印度文化センターでも、定期的にガネーシャプージャー(ガネーシャ神の祭祀)などが行われ、東京近郊からもインド系の人々が集まり、シュローカなどを唱えます。また同じ江戸川区北部には、ヒンドゥー教のクリシュナー神を祀る寺院があり、毎週、日本人や欧米人も含んだ人々がキールタン(宗教歌)を歌うために集っています。神奈川県川崎地域では、ヒンドゥー教の神ジャガンナートを祀る祭礼が毎年開催されています。

沖縄本島には、ヒンドゥー寺院があります。基本的には毎週、近隣に住むインド系住民が参集し、「バジャンの会」を催します。主に商人としてやってきた人々が、シク教の宗教歌を歌います。

神戸にもシク教の宗教施設グルドワーラーが存在し、原則的には毎週、阪神地域の人々が集まります。

## (2) 音楽イベント

音楽イベントは、人々が集い、社交活動を繰り広げる場所です。リトル・インディアと言われる江戸川区でも、ヒンドゥー教の大イベント、ディワラー(インドの正月、光のフェスティバル)が催されます。音楽や舞踊のステージは、こうしたイベントには欠かせません(写真3)。

インド系コミュニティの中には、舞踊や音楽を幼少の頃から習い、こうしたイベントで披露する



写真2 ヒンドゥー教のジャガンナート神  
(2012年6月、川崎市、筆者撮影)

人々がいます。関東地域の広い地域から、多くのインドルーツの人々が集まり楽しめます。

## 5 多文化共生と包摂的社会における 音楽文化

外国ルーツの人々と日本生まれの人々が仲良く生活するためには、言語教育、異文化理解などさまざまな課題が存在します。特に、言語の問題は大事です。多くの自治体で日本語教育が行われていますが、その担い手は不足しており日本語ボランティアに頼る事態も多く見られます。漢語表現、専門用語を極力使わない「やさしい日本語」による情報伝達の必要性も意識され始めています。

本稿で見てきたように、インドの音楽に興味を持つ日本人がいる一方、インド系コミュニティも音楽を持っています。音楽を通じて、人々が集い、交流を行うイベントも少なくありません。

ただ多くの場合、そうしたイベントは「鑑賞型」であることが多いと感じます。本事業で目指す多文化共生では、さらに踏み込んで異文化出自の人々と日本生まれの人々が共にコミュニティミュージックをつくることにより、社会課題を解決する方向を目指したいと思います。

たとえば日本語学習の教科書では、オノマトペを積極的に扱わないことが知られています。しかしこれこそ、日本語のニュアンスをうまく伝え、話者同志の親密性をつくり出す領域ではないでしょうか。ここに、音楽のリズムや旋律の要素を「活用」できるかもしれません。コミュニティ

ミュージック×言語学習という、異分野を掛け合わせた参加型ワークショップにより、異文化の人々が心を通わせる、そのような試みがあってもよいと思います。

\*本項は、本補助事業令和5年度基礎講座での講義内容に基づき、改編したものです。

### 【参考文献】

- Ministry of Foreign Affairs, Government of India. 2024. Population of Overseas Indians. <https://www.mea.gov.in/population-of-overseas-indians.htm> 2024-09-01.
- Sheller, Mimi. 2014. The New Mobilities Paradigm for a Live Sociology. *Current Sociology=La Sociologie Contemporaine*. 62(6): 789-811. <https://journals.sagepub.com/doi/10.1177/0011392114533211> 2023-06-15.
- 出入国管理庁. 2024. 国籍・地域別 在留資格別 在留外国人 (2023年12月) <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/file-download?statInfId=000040186952&fileKind=0> 2024-09-01.
- 寺田, 吉孝. 2021. 南インド古典音楽・舞踊の環流. 世界を環流する「インド」: グローバリゼーションのなかで変容する南アジア芸能の人類学的研究 (松川恭子, 寺田吉孝編, 青弓社). 324-352.
- United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Population Division. 2024. World Population Prospects 2024, Online Edition. <https://population.un.org/wpp/Download/Standard/Population/> 2024-08-30.

(小日向英俊)



写真3 ディワリフェスタ西葛西 (2022年10月, 筆者撮影)